

# トマス・ロギオン 84 と守護天使

赤 城 泰

1. は じ め に
2. Log. 84 のグノーシス的解釈
3. 「かたち」と「像」：反宇宙的の二元論
4. 「像」と守護天使
5. 守護天使の非グノーシス的性格
6. む す び

## 1. は じ め に

1945年12月、上部ナイル、ナグ・ハマディ附近で偶然発見されたコプト語文書群、いわゆる「ナグ・ハマディ文書」<sup>(1)</sup>は、従来とかく不明な点の多かったグノーシス主義の解明に欠くことのできない第一次資料として、近時ますますその重要性を増し加えつつある。<sup>(2)</sup> ことに、1972年以來、エジプト政府がユネスコの協力を得てオランダの書店から出版を進めている『ファクシミリ版ナグ・ハマディ写本』(全12巻、1978年完結予定)、<sup>(3)</sup> および、『ナグ・ハマディ研究双書』に含まれる形で1975年以來刊行されつつある『コプト語グノーシス文書』(11巻の予

- (1) 最近「ナグ・ハマディ文書」の全体が一冊にまとめて英訳出版された。James M. Robinson, ed., *The Nag Hammadi Library: In English*. Translated by Members of the Coptic Gnostic Library Project of the Institute for Antiquity and Christianity, Claremont, California. New York: Harper & Row, 1977.
- (2) 1971年時点までに公刊された内外のナグ・ハマディ関係資料を駆使して、わが国におけるグノーシス主義研究に画期的な貢献をしたのはつぎの書物である：荒井献『原始キリスト教とグノーシス主義』岩波書店、1971年。
- (3) *The Facsimile Edition of the Nag Hammadi Codices*. Published under the Auspices of the Department of Antiquities of the Arab Republic of Egypt, in Conjunction with UNESCO. Leiden: E. J. Brill, 1972 ff.

定)<sup>(4)</sup>の出版とともに、この分野の研究はとみに活気を呈してきているのである。

コプト語「トマスによる福音書」(以下、トマスと略記する)は、上述の全13巻、53文書からなる「ナグ・ハマディ文書」の中の一つであるが、その内容が「デドモ・ユダ・トマス」なる人物の記録にかかる114のイエスの言葉、となっていることもあって、発見後の比較的早い時期から、宗教史(とくにグノーシス主義研究)、初期キリスト教史、新約聖書学(とくに福音書との関連において)等、各方面から熱い注目を集めてきた。その研究史は、僅々この20年程度の比較的短いものであるが、それ自体として学問的興味に満ちたものになっているし、仮説的に導き出されたさまざまな推論も多彩をきわめている。<sup>(5)</sup>

筆者が1960年頃から関心を寄せているトマスの性格、ならびに文献としての伝承の問題について云うならば、諸家の説は大きく二つに分けることができるであろう。一つは、トマスを「キリスト教化したグノーシス文書」<sup>(6)</sup>の中に含める見方であり、他は(筆者も含めて)、逆に「グノーシス化したキリスト教文書」と考える立場である。<sup>(7)</sup>この各々について、それぞれ有力な支持者があり、またそれなりに論拠もあるのであって、いちがいに黑白はつけ難いし、現在でもなお、学界の意見がどちらか一つにまとまるとは云えないのである。

さきに、筆者はこの文書の「文学的发展」の跡づけを試みて、編集の最初期にあたる「原トマス」、ついで「オクシリンコス・トマス」、そして現在我々の手にある「コプト・トマス」に至る、という仮説を立て

(4) *The Coptic Gnostic Library*, 1975 ff., in: Martin Krause, J. M. Robinson, Frederik Wisse, ed., *Nag Hammadi Studies*. Leiden: Brill, 1971 ff.

(5) David M. Scholer, *Nag Hammadi Bibliography 1948-1969* (*Nag Hammadi Studies*, Vol. I), Leiden: Brill, 1971, pp. 136-165. この文献目録は、*Novum Testamentum*, 13 (1971)以降において、継続的に補足されている。

(6) 荒井献, 前掲書 158-169頁。

(7) 上掲書 244頁以下, 注7および8, 参照。

た。<sup>(8)</sup> これらの段階は、私見によれば、もともとは2世紀中葉、シリア東北部におけるユダヤ人キリスト教団を直接の背景として成立した無名のイエスのロギア集（語録）が、オクシリニコス・パピルスとの並行箇所が存在によって知られる時期を経て、古文書学的に400 C. E. のものと推定される現在のコプト語トマス福音書として固定するまでの約250年間に、次第にグノーシス化していった過程に対応するものである。

したがって、トマスの性格を「グノーシス化したキリスト教文書」と規定しても、そのことによって現存のコプト語トマスにおけるグノーシスの特徴が否定されることはない。また、この限りにおいて、現在のトマスをグノーシス主義研究の第一次資料として用いることも、いっこう差し支えないのである。

ただ注意すべきは、現在のコプト語トマスがそのままの形でオリジナルなものでもあるかのように考え、その前段階（オクシリニコス・パピルスとの比較によって疑うべくもない）、および、さらにその前の、最初の段階（ユダヤ人キリスト教的、と筆者が推定するもの）を、検討から除外してしまうことは正しくないのではないか、<sup>(9)</sup> ということである。我々は、トマスの名のもとに伝えられてきたこのイエスのロギア集が、もともとキリスト教とは独立かつ並列に存在していたグノーシス主義がキリスト教的素材をとり入れた（つまり、キリスト教化した）結果成立した「キリスト教的グノーシス主義」にその発生を負っている、とは思わないのである。<sup>(10)</sup>

(8) Tai Akagi, *The Literary Development of the Coptic Gospel of Thomas*. Ann Arbor, Michigan: University Microfilm, Inc., 1965. xvii+406 pp. 赤城泰「《原トマス》仮説」『日本の神学』(5), 1966年, 26-37頁。

(9) もっとも、トマス成立の地と推定されるエデッサのユダヤ人キリスト教そのものがすでに全面的に「グノーシス化」していたというのであれば、トマスは最初から「グノーシス文書」であったと云うことができるであろう。しかし、これは、現在我々の知る限りでは、ありうることは思えない。

(10) 「トマス福音書の担い手」ということが云われる場合、まず、トマスの伝承ないし編集のどの段階におけるトマスについて云っているのかが明らかにされなければ、その「担い手」像も明確なものにはならない。たとえば、日本基督教学会第26回学術大会（1978.9.28-29）における青野太潮氏の「益的熱狂主義の系譜——第2クレメンスの論敵をめぐる」と題する発表においても、この点はかな

ともあれ、トマスの性格をどのように決定するかは、そこに含まれている主要な神学的テーマを端念にときはぐし、同時にトマスを構成する 114 のひとつひとつのロギオンを検討して、どこまでオリジナルなユダヤ人キリスト教的特質を識別することができるか、にかかっている。<sup>(11)</sup>

本小論は、このような意図のもとに、トマスのロギオン (Log.) 84 をとり上げ、とくにユダヤ人キリスト教的特徴をあらわすと思われる「守護天使」(guardian angel, Schutzengel) の概念が、そこでどのような役割を果たしているかを見ようとするものである。Log. 84 の本文はつぎの通りである。

イエスは言われた、「あなたがたは、自分のかたちを見るときは、喜ぶ。しかし (ὁέ), 自分の像 (εἰκὼν) ——それは、あなたがたよりも先に生まれて、死ぬこともなければ (οὐτε), あきらかにされることもない (οὐτε) ——を見る時 (ὅταν), あなたがたはどれだけ耐えられるであろうか。」

Log. 84 (Pl. 95. 24-29)<sup>(12)</sup>

## 2. Log. 84 のグノーシス的解釈

このロギオンがグノーシス的性格をもつという見解は、これまでしばしば表明されてきた。たとえば、ピュエシュは、トマスに含まれている「未公開の、全く新しい」、しかも「はるかに秘教的またはグノーシス

---

らずしも明らかでなかった。

(11) 筆者は、前掲「《原トマス》仮説」において、トマス・ロギオン 30 を、そのような意図のもとに取り扱った。

(12) コプト語テキストは A. Guillaumont, H.-Ch. Puech, G. Quispel, W. Till and Yassah Abd Al Masih, *The Gospel According to Thomas*. Leiden: Brill (New York: Harper & Bros.), 1959. ロギオン番号のあとに続くカッコ内の数字は Pahor Labib, *Coptic Gnostic Papyri in the Coptic Museum at Old Cairo*. Vol. I. Cairo, 1956. によるプレート番号および行数を示す。なお、トマス全体の邦訳に、荒井献「トマスによる福音書」『聖書の世界』第 5 巻、講談社、1970 年、273-298 頁、がある。

的な特徴を示すか、あるいはそのような教えを前提とする」<sup>(13)</sup> ロギオンの一例として、この Log. 84 をあげているのである。

また、ロバート・グラントは、すでにドレスがこのロギオンをそれに先行する Log. 83 と結びつけて解釈している<sup>(14)</sup> のに対して、さらにその後の Log. 85 も加え、三つのロギオンをまとめて取り扱うことを提案する。<sup>(15)</sup> かれは、まず Log. 85 から始めて、順次さかのぼりながら、この語群の意味をつぎのように解釈する。<sup>(16)</sup>

アダムは、大きな力、大きな富から生まれた、と云われる。そのわけは、アダムは神の像 (image) とかたち (likeness) の写し (copy) であり、かつ、男であると同時に女でもあった (創世紀 1:26-27) からである。しかし、アダムは、グノーシス主義者にとってふさわしい者ではなかった。というのは、アダムは、生みかつ増えることによって、また、エバがかれの肋骨から造られたときに、男と女に分割してしまった

(13) Edger Hennecke / Wilhelm Schneemelcher, *Neutestamentliche Apokryphen*, 3. Aufl., I. Bd., Tübingen: J. C. B. Mohr, 1956, S. 220: "Einige Beispiele dieser bisher unbekanntenen Worte..... weisen Züge auf oder setzen Lehren voraus, die viel eher esoterischen oder gnostischen Charakters sind." もっとも、ピュエッシュは、トマスが全体としてグノーシス主義者の手に成るものとは考えていない; *ibid.*, S. 221: "Das Thomas-Evangelium scheint weder ausschliesslich noch ursprünglich das Werk eines Gnostikers sein."

(14) Jean Doresse, *The Secret Books of the Egyptian Gnostics*, London: Hollis & Carter, 1960, p. 377.

(15) Robert M. Grant and David Noel Freedman, *The Secret Sayings of Jesus*, New York: Doubleday & Co., Inc., 1960, pp. 181 ff.

(16) Log. 83 および 85 の本文は次の通りである。

イエスは言われた、「像 (εἰκόμ) は人間にあきらかにされているが、その [像の] 中にある光は、父の光の像 (εἰκόμ) の中に隠されている。かれ [父] はあきらかにされるであろうが、その像 (εἰκόμ) は、かれ自身の光によって隠されている。」

Log. 83 (Pl 95. 19-24)

イエスは言われた、「アダムは、大きな力 (δύναμις) と大きな富から生まれたが、あなたがたにふさわしい者にならなかった。なぜなら、もしかれがふさわしい者であったら、死を味わうことはなかったであろうから。」

Log. 85 (Pl. 95. 29-34)

ことを通して、罪を犯したからである。(エバはアダムに復帰しなければならない。Log. 112)

つぎに、Log. 84 が告げるように、一般に人間は、明白に、自分たちが今でも保持している「かたち」を見ることができる。しかし、すべての人間が「像」を見ることができるわけではない。なぜなら、像を見ることは、すなわちキリストを見ることであり、また、み国を、そしてまさしく内なる人 (the inner man) を見ることだからである。この真の像は、死ぬこともなければ、はっきりとあらわにされることもない。今は、像は、はっきりと、あるいは完全に見ることはできない。それは死後はじめて十分に見られるのである (I コリント 13:12. ドレスがすでに指摘している箇所)。

最後に、Log. 83 は、なぜ今は像が十分に見られないのか、を説明する。像は、光 (light) を内包している (Log. 50)。しかし、この光は、父の光の像によって曇らされている (II コリント 4:4, 6 参照)。けれども、のちに「彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである」(I ヨハネ 3:2)。

以上三つのロギオンの意味はおよそこのようなものであるが、トマスはそれを、おそらくナハツェ派における「像」の用語法にならって (ヒッポリュトス『全異端反駁』5, 8, 10), しかしあまり明瞭にはではなく、表現したものであろう、とグラントは見るのである。

比較的最近になって、さらにメナールは『ナグ・ハマディ研究双書』第5巻として、トマス全体にわたる注解書を公けにし、その中で Log. 84 について、「トマスのグノーシス的思想をいっそうよく示している」と述べているのである。<sup>(17)</sup>

(17) Jacques-É. Ménard, *L'Évangile selon Thomas (Nag Hammadi Studies, Vol. V)*, Leiden: Brill, 1975, p. 186: "Ce logion illustre encore mieux la pensée gnostique de Thomas."

## 3. 「かたち」と「像」：反宇宙的二元論

さて、Log. 84 は、一見明らかのように、「かたち」と「像」の明白な対比を示している。そこでは、人間が「かたち」を見ることは、喜ばしいが、しかし「像」を見ることにはとうてい耐えられない、と云われているようである。メナールは、Log. 83 の注解においてこの対比に注目し、ついで Log. 84 においても、明かに、「霊的な像」(l'εἰκὼν spirituelle) と「物質的なかたち」(la «ressemblance» matérielle) との間に区別が見られることを指摘している。<sup>(18)</sup> この対比ないし区別のゆえに、メナールによれば、Log. 84 は「トマスのグノーシス的思想」をよりよく示すもの、と云われるのである。「永遠の、そして隠されている像」(l'image éternelle et cachée) は、「地上的、物質的像」(l'image terrestre, matérielle) とちがって、「人間に、その本来的自己 (son «moi» authentique) を啓示するものである。人間とその本来的自己との合一こそは、人間自らのグノーシスの探究によってもたらされる。グノーシス主義者は、かくして、自らの像を追求し、像はかれとの出会いを求めるのである。」<sup>(19)</sup>

ところで、我々が「かたち」と訳したコプト語の *eine* は、グラムによれば、動詞としては「似る」「なぞらえる」(resemble, be like) を、名詞としては「似すがた」「相」(likeness, aspect) を意味する語である。これに対応するギリシア語は、*ὁμοῖον* (動詞) および *ὁμοίωσις*, *ὁμοίωμα*, または *μορφή* (いずれも名詞) であって、旧約聖書のギリシア語訳 LXX においては、主としてヘブル語の *dāmāh* および *demûth* の訳語として用いられているものである。<sup>(20)</sup>

トマスにおいて、*eine* は、全部で9回用いられている。そのうち、Log. 13 (4回), Log. 21 (2回), Log. 102 (1回), Log. 114 (1

(18) *Ibid.*, pp. 184 f.; cf. Rodolphe Kasser, *L'Évangile selon Thomas*, Neuchâtel: Delachaux & Niestlé, 1961, pp. 48, 103, 148.

(19) Ménard, *op. cit.*, p. 186.

(20) W. E. Crum, *A Coptic Dictionary*, Oxford, 1939, p. 80 b. Cf. also Kasser, *op. cit.*, pp. 48, 148.

回), はいずれも「なぞらえる」「くらべる」(ressembler, comparer)の意であって, 「似すがた」または「かたち」(ressemblance)として用いられているのは, 我々の Log. 84 の1回だけである。

つぎに, 「像」と訳した語は, ギリシア語の *εἰκών* がそのままコプト語の中に取り入れられたもので, このような外来語または借用語 (loan word) は, Log. 84 における *δέ, ὅτε, ὅταν* などにも見られるように, コプト語ではごく普通のことである。リッデル=スコットによれば, *εἰκών* の意味は, (1) 絵画や彫像のような「似すがた」「生き写し」(likeness), 「似像」(image), 鏡に写った「映像」(image), 人の容姿の描写, 生き方の表現, (2) 装い, 見せかけ, 幻影, 影像, 仮象, (3) 類似物, 比較, (4) 模範, 手本, 原型 (archtype) 等である。<sup>(21)</sup>

トマスにおいて, *εἰκών* は, Log. 22 (2回), Log. 50 (1回), Log. 83 (3回), Log. 84 (1回) の合計7回用いられている。このうち, Log. 22 の「像の代わりに像をつくる」において, 前の「像」は地上的な像を, 後の「像」は靈的な像を意味すると考えられ, この区別は Log. 83 においても認められる。<sup>(22)</sup> すなわち, 「人間にあきらかにされている」像は地上的な像であるのに対して, 「父の光の像」および「その像」とある場合の像は靈的な像を指すようである。Log. 50 においてはこの区別はかならずしも明らかではない。我々の Log. 84 における「像」は, 靈的な像を指しており, それと対照的に, 地上的な像 (Log. 22, 83, 50? におけるごとき) は, 別の語, すなわち「かたち」(*eine*) によって云い表わされている, と考えることができる。つまり, *εἰκών* は, 靈的と地上的との二種類の像を表わす場合と, 靈的像のみを意味する場合とがあり, Log. 84 はその後者のケースなのである。上掲の辞書的区分で言えば, 最後の(4)の「原型」あたりが, これに最も近い用法に

(21) H. G. Liddell and R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, New (9th ed.), Oxford, 1940, p. 485 b.

(22) Bertil Gärtner, *The Theology of the Gospel of Thomas*, London: Collins, 1961, pp. 202-204, は, Log. 83 に関連して二種類の「像」があることを指摘し, *εἰκών* と *ὁμοιότης* (=likeness) の対比を表すものとしている。(ただし, ゲルトナーは *εἰκών* よりも *ὁμοιότης* を優位に据えている。) Ménard, *op. cit.*, p. 184 f. における l'image の二つの用法も, これと同じ線上にある。



なるであろう。

以上、我々は、Log. 84 における *eine* と *εικόν* の語義をやや辞典的に検討したのであるが、このことだけからは、このロギオンが示している両者の一見きわ立った対比は、かならずしも浮かび上がってこない。それにもかかわらず、このロギオンは、両者を明らかに対置しているようである。とするならば、問題は、このロギオンは、「かたち」と「像」をどのような意味で使い分けているのか、という点の解明にかかってくることになる。

ここで思い出されるのは、グノーシス主義を成立させるに必要なかつ十分なモチーフの一つとしてあげられる「反宇宙的二元論」という考え方であろう。荒井猷氏は、そのすぐれた著作において、グノーシス主義の本質を形成すると考えられる三つのモチーフを確認している。すなわち、第1は「救済的自己認識」、つまり「究極的存在と人間の本来的自己がその本質において一つであるという<sup>グノーシス</sup>認識に救済を見出す」というモチーフ、第2は上にふれた「反宇宙的二元論」、すなわち、究極的存在（人間の本来的自己がそれに由来し、かつそれと同質である）と創造者（人間の非本来的自己、ひいては宇宙そのものがそれに由来する）との間に存在する究極的、絶対的な敵対関係というモチーフ、そして第3に、人間の外側からの「啓示者または救済者」の要請というモチーフである。<sup>(23)</sup>

いま我々の主題にとくに関わるのは、この中の第2のモチーフである。つまり、「像」は、「究極的存在」に由来し、かつそれと同質である人間の「本来的自己」をあらわすが、これに対して「かたち」は、「創造者」に由来する人間の「非本来的自己」を指す。そして、両者の間には「反宇宙的」な二元論的敵対関係がある、ということになるのである。先にふれたメナールも、おおむねこうした視点からこのロギオンを読んでいる、といって差し支えないであろう。

しかし、Log. 84 は、はたしてこのようにグノーシス的視点からの解釈しか許さないものであろうか。はたして、創造者と究極的存在という対立関係、またそのように定立された究極的存在と人間の本来的自己と

(23) 荒井猷、前掲書『原始キリスト教とグノーシス主義』337-356頁、とくに346-350頁。

の同質性、端的に「父と自己との同質性」<sup>(24)</sup> という思想を導入することなしには、このロギオンのもつ「かたち」と「像」の対比は理解できないものなのであろうか。

#### 4. 「像」と守護天使

1975年、前カイロ・コプト博物館長 パホール・ラビブ 古稀記念論文集が『ナグ・ハマディ研究双書』第6巻として出版されたが、キスベルはこれに「守護神と精霊」と題する論文を寄せている。<sup>(25)</sup> その所論は、我々が問題にしている点に関係がある内容を含んでおり、実際 Log. 84にも言及しているので、以下その要点をたどって見よう。

この論文におけるキスベルの意図は、1956年、上記ラビブによるコプト語『ピリポ福音書』の公刊にいたるまで長い間謎に包まれていたヴァレンティノス派グノーシス、とりわけ、最も偉大なグノーシス主義者と云われるその祖ヴァレンティノス自身のグノーシス思想に、ユダヤ人キリスト教神学における「天使聖霊論」(angel pneumatology)を手がかりにして、より近く接近を試みようとするところにある。彼によれば、ヴァレンティノス(派)のグノーシスについて、つぎの3点で、学界におよその合意ができていて、といわれる。

(1) ヴァレンティノス自身の教説は、弟子プトレマイオスやヘラクレオンに比して、はるかに単純であった。彼はただ一つのソフィアを知っていただけであり、いわゆる「魂的」(psychic)なものについては特別の評価をしていない。ただし、彼に続く西方ヴァレンティノス派の代表者たちの見解が、どの程度まで師自身の思想的展開に負っていたかは、かならずしも明らかではない。

(2) ヴァレンティノスは、『ヨハネのアポクリュフォン』に見られるものに類似するグノーシス神話を知っていて、それをキリスト教化した。

(24) 上掲書、347頁。

(25) Gilles Quispel, "Genius and Spirit," in: Martin Krause, ed., *Essays on the Nag Hammadi Texts in Honour of Pahor Labib (Nag Hammadi Studies, Vol. VI)*, Leiden: Brill, 1975, pp. 155-169.

(3) 一般に、グノーシスの教説は、自己経験の神話的表現、と見るべきである。したがって、その中心点また出発点になるのは、常に、人間であり、また人間のこの世における状態であり、そしてその人間の救済の意識ということである。ヴァレンティノスの場合、その神話の中核をなすのは、人間と、その人間につく天使あるいは超越的自己との間に、<sup>つい</sup>対の関係 (syzygia) が成立することであり、両者の「神秘的結合」(mysterium conjunctionis) である。ところで、ここに云う天使は、実は「守護天使」(guardian angel) にほかならない。これは、ユダヤ教および原始キリスト教において、像 (image) として、また、対の片方 (counterpart) としてあったもので、もとはギリシア的、ピュタゴラス的「ダイモーン」に由来するものなのである。

キスベルは、そこで、このような考え方の背景にある「天使聖霊論」の成立過程に眼を向ける。まず、聖霊と天使が同一視されるケースがある (イザヤの昇天 9 : 35 f., 使徒行伝 8 : 26 ff.)。また、一つの霊が「七つの霊」に発展している場合が見られる (イザヤ 11 : 2, ヨハネ黙示録 1 : 4 f.)。そして、アレクサンドリアのクレメンスにおける「七つの《最初の被造物》(プロトクティストイ)」は、七人の天使たちにはほかならない。キスベルは、「想像力に富んだユダヤ人キリスト教徒の思考にとって、一つの聖霊をさまざまな天使たちに分割することは、けっして難かしいことでなかった」とのべている。<sup>(26)</sup>

彼によれば、守護神 (genius) やダイモーンは、ヘレニズム時代のパレスティナにおけるユダヤ人には、よく知られた概念であった。その人は、守護天使を「イコニン」(iqonin) と呼び、その天使がついている人間の正確な像、また対の片方を示すものと考えていた。こうした考え方をパレスティナのキリスト教徒も継承していたことは、使徒行伝 12 : 15 の「ペテロの御使」によっても知られる。同じことは、シリアのエデッサに中心をもつアラム語キリスト教徒についても云える。『主の契約』(Testamentum Domini) には、つぎの言葉がある——「すべての魂について、像 (salma) または型 (type) が、世界の礎がおかれる以前から、神の顔の前に立っている。」ここに用いられているシリア語の

(26) *Ibid.*, p. 158.

「像」は、創世記 1:27 において、人間の中にある神の像を指して用いられているヘブル語「ツェレム」(*tselem*) と関係がある。真の神の像は、したがって、人間の外形や理性や自由意志などではなくて、まさに人間の永遠的、無意識的、超越的自己なのである。これは、創世記 1:27 の、まことに印象的な解釈である、とキスペルは云う。

ここで、キスペルは、我々のトマス Log. 84 に言及するのである。人間は、鏡に写して見るように自分の外形を見るときは、喜ぶ。しかし、自分の像、あるいは自分の守護天使——それは、いま天にあって、創造の時に来ずっと神の顔を見つめている——を見るとき、自分の本来的自己 (*his real Self*) とのこのような出会いに、人は耐えることができるであろうか。<sup>(27)</sup>

さらに、キスペルは、アフラハトが、マタイ 18:10 における「小さい者」の守護天使を聖霊と同一視していること、またマカリオスにおいては聖霊と像が同定されていること、さらに『トマス行伝』に含まれている「真珠の歌」(*The Hymn of the Pearl*) においては、自己は同時に聖霊および守護天使であること、を指摘する。つまり、彼の見るどころでは、聖霊 = 守護天使 = 像 = 本来的自己、というユダヤ人キリスト教的定式が、2世紀前半のシリアにおいて広く行きわたっていたのである。そればかりではなくて、同じ考え方は、ローマにおいて(『ヘルマスの牧者』)も、アレクサンドリアにおいて(『ピスティス・ソフィア』、オリゲネスの *De Principiis*, および『テオドトス抜粋』)も、見出される。

このように、ユダヤ人キリスト教に由来する天使聖霊論が地中海を取りまく広い範囲にわたって認められるということは、キスペルによれば、ヴァレンティノス派グノーシスの解明に重要な意味をもつものである。彼は、このような視角から、『ピリポ福音書』(Sec. 61)に見られ

(27) ちなみに、この関連で、キスペルは Log. 83 にもふれる。かれは、これを、「像」に関する「もう一つの、はなはだ難解なロギオン」と呼びつつも、Log. 83 と 84 は「ダブルット」(*doublets*) であろう、と云う。このような例はトマスの中に多く見られ、トマスの作者が、一つは禁欲主義的 (*encratic*)、もう一つはパレスティナの (Palestinian) という二つの文書資料を用いたことを証明するものである、とする。 *Ibid.*, p. 159.

る「花嫁の部屋」(the bridal chamber)の礼典(そこで、入信者は花嫁として、天使あるいは高次の自己と結合する)の表象に接近する。そして、「このグノーシス概念は、ユダヤ人キリスト教の天使聖霊論に深く根ざしている」<sup>(28)</sup>ことを確認する。

最後にキスペルは、以上のようなユダヤ人キリスト教的天使聖霊論がヴァレンティノス派グノーシスの研究に有効であるばかりでなく、マニ教の開祖マニに対しても深い影響を与えたにちがいないということを、「ケルン・マニ・コーデックス」に言及しつつ推論して、この論文を結ぶのである。

## 5. 守護天使の非グノーシス的性格

以上、我々は、キスペルの所論をたどりつつ、彼が Log. 84 の解釈にユダヤ人キリスト教の「守護天使」の思想を、どのような脈絡で導入したかを見た。

ところで、Log. 84 を解釈するにあたって「天使」に言及した学者に、ウブサラ大学のゲルトナーがある。彼は、その著『トマス福音書の神学』における「人間観」に関する叙述の中で、とくに「像とかたち」(“Image and Likeness”)の問題を取り扱っている。<sup>(29)</sup> それによれば Log. 84 における「かたち」(*eine*)はギリシア語の *ὁμοίωσις*, *ὁμοίησις* (創世記 1:26) と結びついている語で、したがって、このロギオンは「啓発された人間だけが所有し、無知なる人間は失ってしまったかたち」について語っているものとされる。人間にとって、このような意味での「自分のかたちを見る」ことは、まさしく喜びの理由になる。人間の「かたち」は、天上における自分の似姿をあらわすから、そ

(28) *Ibid.*, p. 166: “the gnostic concept is rooted in the Angel pneumatology of Jewish Christianity.” なお、かれによれば、『ピリポ福音書』は、テルトゥリアヌスとほぼ同時期に、アンテオケにおいてヴァレンティノスの教説を忠実に継承した唯一の人物と目されるアクシオニコス (Axionicus) の手によって成立したものであり、したがって、ヴァレンティノス自身の教えを正確に伝える文書である、と考えられる。*Ibid.*

(29) Gärtner, *op. cit.*, pp. 187-210, esp. pp. 200-206.

れが発展するのを見ることは、自分が救済を獲得する途上にあることを意味することになるからである。

このように、ゲルトナーは、このロギオンの前半の意味をとる。これに対して、後半における「像」は、彼によれば、あきらかに「天界あるいはアイオーンの世界に属するもの」を指しており、この点を理解するために最も適切なことは、つぎのようなグノーシスの理念、すなわち「すべての真のグノーシス主義者は、天界にある『生命の安全保管場所』の中に、『天使』あるいは『双子の片方の魂』をもっている」ということ、そして「人間の中にある光の粒子は、救済が達成されるに先立って、この天的要素と結ばなければならない」<sup>(30)</sup> ということを想起することである。かくして、ゲルトナーによれば、グノーシス主義者とは、このような「天使」の像、あるいはそれを映し出す者にはかならないのである。『ピリポ福音書』が、このような天上の天使と地上の像とが天上において結合されること (Sec. 26)、また、バプテスマにおいて像が生み出されて天上で「花婿」と結ばれ、そこに究極的復元あるいは完成が成就されること (Sec. 67)、について語っている理由もそこにある。

以上のことをふまえて、ゲルトナーは、明確にグノーシス的な視点から、Log. 84 をつぎのように解釈する——「人間が自分のかたちをいま見ることができるのは、喜びである。しかし、真のグノーシス主義者にとって、本来の目標は、自分の天上の像、自分の『双子の片方の魂』を見ることができるようになることである。……かれらは、完全に救済されるまで、いかに多く苦しまなければならないことであろうか。」<sup>(31)</sup>

Log. 84 についてのゲルトナーの所説は、大要以上のようなものである。彼は、「天使」について言及はしているけれども、キスペルのようにその系譜をくわしくたどろうとはしない。彼の興味は、この書物全体について云えることであるが、むしろ全くグノーシス的視点に立ってこ

(30) *Ibid.*, p. 205: "..... every true Gnostic has an 'angel' or 'twin soul' in 'the place of life's safekeeping' in the heavenly world, ..... the particle of light in man must be united with this heavenly element before salvation can be consummated."

(31) *Ibid.*, p. 206.

のロギオンを解釈することにあつたようである。

要するに、ゲルトナーは、天使を人間の像と同定し、かつ、これを人間から引き離して天上に位置づけることによって、人間の本来的自己と同一視し、そうすることによってグノーシスの二元論の枠組を忠実に守っている、と云えるであろう。この点、キスベルも、その詳細な「天使聖霊論」にもかかわらず、像と守護天使とを同一視するだけでなく、さらに進んで、この両者を聖霊および本来的自己とさえも同一視することにおいて、ゲルトナーと同様であると云ってよいであろう。

我々は、Log. 84 の検討において、ゲルトナーやキスベルが天使、とりわけ守護天使の概念を援用することの意義を十分に評価したいと思う。しかし、それを人間の「本来的自己」と結びつけることには、疑問を感じざるをえないのである。その理由は、そもそも「天使」という概念は、神と人間が二極分化の傾向をとり始め、その結果、ともすれば両者の間に二元論的関係構造が固定しがちになったとき、人間はどのようにして神の言を聴き、その意志や計画を知りうるかという疑問に直面して、いかにかしてこれを克服しようとする努力の中から生み出されたところの、云うなれば人類の《知恵》の所産ではなかったか、という素朴な疑問があるからである。

ここで、ラビ文献によって知られるユダヤ人の（守護）天使像の概略をたどって見ると、およそつぎのようなことが知られる。<sup>(32)</sup>

まず、天使は、他のすべての被造物と同様に、神によって造られたものである。ただし、創造の何日目と造られたかについては、時には詩篇 104 : 3 f. によって第 2 日目とされ、時には、他の「飛ぶもの」と共に（創世記 1 : 20 f.）第 5 日目とされた。いずれにしても、第 1 日目でなかったことは確かである。なぜなら、神が「天をのべ、地をひら」いたとき、「だれがわたしと共にいたか」と書かれているように（イザヤ 44

(32) George Foot Moore, *Judaism in the First Centuries of the Christian Era: The Age of the Tannaim*, Cambridge: Harvard Univ. Press, Vols. I & II, 1927; Vol. III, 1930, *passim.*; Hermann L. Strack und Paul Billerbeck, *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch*, München: C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung (Oscar Beck), 1926; 6. Aufl., 1974, *passim.*

:24), ミカエルもガブリエルもまだ存在していなかったからである。<sup>(33)</sup> 神は、こうして造られた天使たちと共に、天上で、云わば神の「家族」(familia)を構成する。創造の第6日目に「人」を造るとき、神は、天使たちに「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り……治めさせよう」(創世記 1:26)と云って相談をかけたが、天使たちは、詩篇 8:4 f. によって、この提案に異議を申し立てた、と云われる。天使は、霊 (spirits) であるが、しかし、非物質的なものではなくて、大気のようなもの、燃えているもの、輝く光である (詩篇 104:4)。しかし、他方、天使は立って歩き、聖なる言語 (すなわちヘブル語) を語るものとされ、人間は天使の姿に似せて造られた、とも云われる。これが、人間における「神の像」の意味である。天使は、食べることも、飲むこともない (士師記 6:18 ff., 13:16; トビト書 12:19)。また、生むことも、増えることもしない (マタイ 22:30)。さらに、神によって造られたのであるけれども、永遠に生きるものであって、けっして死ぬことがない (エチオピア語エノク書 15:4-7;<sup>(34)</sup> マタイ 22:30)。天使の知識は人間のそれよりも広大であるが、しかし無限ではない。たとえば、「報復の日」や「あがないの年」がいつ来るかは、天使にすら知らされていない (イザヤ 63:4)。天使は、罪を許すことができないし、そのような任務は与えられていない。

では、天使に委ねられているつとめは何であるか。まず、天にあっては、香をたき、歌をもって神を礼拝し、これに仕えるものである。天使は、また、さまざまな任務を負ってこの世に遣わされる神の使者、特使である。これが「天使」(*mal'akim*, ἄγγελοι) のもとの意味である。天使は、自然界の運行責任者でもあり、天体の運行、四季や暦日の管理、天変地異の作動などは、かれに委ねられた権限である。

とりわけ重要なのは、人々のために、とくにイスラエルのために、「仲介者」(intermediaries; しかし「仲保者」mediators ではない) として執り成しをするつとめである (ゼカリヤ 1:12; ヨブ 33:24)。

(33) もっとも、旧約偽典ヨベル書 2:2によれば、すべての天使は第1日目に造られた。

(34) 日本聖書学研究所編『聖書外典偽典』第Ⅳ巻、教文館、1975年、186-187頁。



これが個々人、また国家のための「守護天使」である（マタイ 18:10；使徒行伝 12:14 f.）。最後に、しかし、おそかれ早かれ、すべての人に例外なしにやってくるのは「死の天使」である。かれは、神の命令によって人間を訪れ、義しい者にも義しくない者にも、公平に、委任されたつとめを執行するのである。

以上が、主としてラビ文献によって知られるユダヤ人の天使観の大筋であって、それが初期キリスト教によっても受けつがれていたことは、上記の関係箇所の指摘からもかいまみることができる。しかし、反面、このように描き出される天使が、教義的に、ユダヤ人の《宗教》にとってどれほど大きな位置を占めていたか、という問いに対しては、おそらく答えは否定的にならざるをえないであろう。天使はその人々の宗教的崇敬、まして礼拝の対象になったことはないし、「正統的ユダヤ教において、天使は、人間と神との間の仲保者ではなかった」<sup>(35)</sup>のである。

たしかに、ユダヤ教において、それが正統的、神学的であればあるほど、そこにおいて天使はかならずしも重要な位置を占めるものではない。天使が大いに活躍する場を与えられるのは、むしろ、教訓的説教、通俗的説話、民話、伝説、ないし民間信仰というような場面においてなのである。<sup>(36)</sup> G. F. ムーアも、疑うべからざることとして認めるように、多くの敬虔なユダヤ人にとって、自分たちひとりびとりに守護天使がついているという信念が、神意に基づく神の不断の加護を日夜思い続けるのに、どれほど大きな力になっていたか知れない。「書記天使」(recording angel) というような天使がいて、すべての人々の言行を「一つの覚え書」に書きとめておき、これを逐一神に報告し、神は「耳を傾けてこれを聞かれ」る（マラキ 3:16；ヨハネ黙示録 20:12）、という信念は、人々の、ともすれば揺れ動きがちな良心を、どれほど確かなものにしてくれたか知れないのである。<sup>(37)</sup>

(35) Moore, *op. cit.*, Vol. I, p. 411; cf. *ibid.*, note 2: "They communicate God's message to men; but they do not convey men's prayers to God."

(36) したがって、天使は「ミシュナ」では言及されていない。しかし、2世紀の「ミドラシュ」には、頻繁にあらわれている。

(37) Moore, *ibid.*, pp. 410 f. "Engel als Schreiber" については Strack-Billerbeck, *op. cit.*, Bd. III, S. 840; Bd. IV/2, S. 1041, 参照。

ともあれ、このようなユダヤ人の天使観が、各地に散在していたユダヤ人キリスト教徒によっても継承されたであろうことは、想像に難くない。とくに、天使という考えそのものが、今日流に云うならば教義学各論の一項目として論ぜられる筋合いのものではなく、したがって、かならずしも厳密な概念規定や学問的叙述を要請するものでないだけに、それはきわめて素朴に、しかし日常的にはきわめて重要な意義をもつものとして、かれらに受け入れられていたであろう。さきに見たように、キスベルが、ユダヤ人キリスト教の多彩かつ広範囲にわたる伝承の各所にその痕跡を見出すことができたのも、けっして理由のないことではないのである。

以上のことをふまえて、我々は、Log. 84 について、つぎのように考えたい。まず、キスベルやゲルトナーとともに、このロギオンの解釈にあたって、我々も、天使、とくに「守護天使」の概念を導入することが適当である、と考える。そして、「自分の像」は自分の守護天使にほかならないとする点についても、とくに異論はない。しかし、グノーシス的解釈をとる限り不可避的になるような仕方、「像」(=守護天使)を人間の「本来的自己」と同定することには、十分な説得力があるとは思われない。我々は、そうではなくて、むしろ前述のように素朴なユダヤ的伝統的天使観によりながら、Log. 84 をつぎのように読むことができるし、そう読んで差し支えない、と考える。

あなたがたは、自分の外形だけを見て、満足すべき状態にあると思って喜んでいる。しかし、あなたがたには、それぞれ、守護天使がついている。かれは、天使であるから、死ぬこともなければ、あなたがたにはっきり見えることもない。あなたがたは、この天使の姿に似せて造られた。だから、あなたがたは、めいめい、その天使の姿を自分の像として、もっている。したがって、自分の像を見ることは、自分の守護天使を見ることになる。しかも、この天使を通して、あなたがたのこの世における生きざまは、すべて神に知られている。だとすれば、あなたがたは、このような自分の像を、はたしてまともに見ることができるであろうか。それには、とうてい耐えられないのではない

か。

## 6. む す び

以上、我々は、まずトマス・ロギオン84がその中に一見明白に対照的な二つの用語、「かたち」と「像」が含まれていることから、そのグノーシス的性格が主張されるに至った事情を見た。このような解釈に従えば、「かたち」と「像」の対比は、すなわち、人間の非本来的自己と本来的自己の対比を意味し、ひいては、創造神と究極的存在の対比にもつながるものとなる。つまり、グノーシス主義が成立するに必要な条件の一つとしての「反宇宙的二元論」を可能ならしめるような要素をこのロギオンは含んでいる、と解されることになるのである。

しかし、ユダヤ人キリスト教徒の間に極めて自然に継承されたと思われるユダヤの天使観によれば、天使は、神と人間の両極分化を促進することではなくて、ユダヤ教の《敬虔》を基盤とした豊かな宗教生活ないし国民文化を守る視点から、むしろそうした不毛な思弁的志向を阻止する目的に役立つものであったことを知るのである。神と人間は明確に区別されつつも、けっして分離されてはならない。天使は、そのような分離にブレーキをかける役割を実際的に果たすものであった。とりわけ守護天使の発想によって、グノーシス的の二元論的モチーフは、鮮明にされたのではなくて、むしろ克服されたのである。

したがって、我々は、このロギオンの「かたち」と「像」に、上にふれたような二元論的対立を見ない。「かたち」は、あくまでも人間のかたちであり、この世におけるその生の外形である。「像」は、個々人につく守護天使である。この天使は、神につくものであると同時に、その人間につくものである。ゆえに、「かたち」と「像」の対比は、現実の個々の人間と、その人間につく守護天使との関係を、ユダヤ人キリスト教徒にとってはきわめて順当な仕方、のべたものにほかならない。天使自体は、もともとグノーシス的性格をもつ概念ではなかった。天使は、一方において、人間の本質はいわゆる究極的存在と同質である（父と同質）、という考えを拒否するとともに、他方において、究極的存在を創

造神の上位に設定することによって絶対的の二元論をつくり上げるような考え方を否定するものであったのである。

要するに、我々は Log. 84 がグノーシス的に解釈されなければならない積極的な理由を見出すことができない。コプト語トマス福音書は、少なくともその伝承史ないし編集史的発展の最古の段階においては、基本的にユダヤ人キリスト教的性格をもつものであって、その痕跡は、その中に含まれている 114 のロギオンの随所に識別することができる。Log. 84 も、そのようなロギオンの一つなのである。<sup>(38)</sup>

---

(38) 本稿は、日本基督教学会第 26 回学術大会（1978. 9. 28-29, 東海大学）において、筆者が「トマス・ロギオン 84 と守護天使論」の題のもとに発表したものを骨子とし、その後の検討を加味して、文章化したものである。

(1978. 10. 31)

Coptic Thomas Logion 84 and the  
Guardian Angel

Tai AKAGI

Logion 84 in the Coptic *Gospel of Thomas* reads as follows: "Jesus said: when you see your likeness, you rejoice. But when you see your images which came into existence before you, (which) neither die nor are manifested, how much will you bear!" Apparently there is a contrast between the two words here, namely, "likeness" and "image." It is often said that the former represents man's earthly, material figure (therefore his unreal Self), whereas the latter points to man's heavenly, spiritual substance (therefore his real Self). Thus the contrast could be taken to mean one of the major gnostic motifs: "anticosmic dualism" (S. Arai). Consequently, this logion has been subjected to a more or less gnosticist interpretation by such prominent scholars as Puech, R. M. Grant, Gärtner and Ménard.

Now Quispel in his recent article entitled "Genius and Spirit" (1975) calls attention to the significance of the Jewish Christian idea of the "guardian angel," which ultimately constitutes the so-called "angel pneumatology."

The present writer attempts in this article to interpret this logion along the line suggested by Quispel. He is not convinced, however, if he should go so far as to identify *Thomas'* "image" with man's real Self, as Quispel and others do. Since the very idea of the guardian angel seems to him to point in an opposite direction, it is very hard for him to find any positive reason for interpreting the logion in a gnosticist way.

This observation also confirms the view that the Coptic

*Thomas* originally must have been of Jewish Christian nature at the earliest stage of its *traditions*-and /or *redaktionsgeschichtliche* development. Many of the 114 logia included in this Gospel may well be so interpreted as to offer positive evidences to that effect. One such logion, as the present writer sees it, is Logion 84.

北星論集(第16号) 正誤表

	誤	正
39頁	2行目 ヒューマニス	ヒューマニスト
41頁	下から 6行目 Jhon	John
55頁	10行目 11行目 座折	挫折
71頁	9行目 一般値	一数值
81頁	3行目 60日払為替	8日払為替
109頁	1行目 メカトズム	メカニズム
109頁	2行目 コンナロール	コントロール
116頁	16行目 $\partial Y / \partial G$	$\partial Y / \partial G$
116頁	17行目 $er / \partial G$	$\partial r / \partial G$
209頁	2行目 ates	Rates
201頁	8行目 papers	paper
210頁	8行目 an	a